

令和3年度 第1回 昭和大学病院 医療安全監査委員会 議事録

日時 令和3年10月(新型コロナウイルスの影響を考慮し資料送付にて実施)
出席者 監査委員
貝阿彌誠委員長(弁護士)、越石孝一委員(患者代表)、
高橋寛委員(昭和大学藤が丘病院病院長)
病院側
相良博典病院長、小林洋一医療安全管理責任者(副院長)、
武井秀史医療安全管理副部門長、荒川千春看護部長、佐々木忠徳薬剤部長
徳田幸子医療安全管理者、高橋笑美子医療安全管理者、
古田康之医療安全管理者、大石竜医療機器安全管理責任者、
渡邊裕之医療放射線安全管理責任者、野田秀裕医薬品安全管理責任者、
田口彰彦事務部長、佐々木真管理課長、秋山好司クリティカルマネジメント課長、
大川宏クリティカルマネジメント課係長、林晃汰医療安全管理部門専任事務員、
横山健吾医療安全管理部門専任事務員、
佐々木天音医療安全管理部門専任事務員

議 事

1. 委員長挨拶、出席者紹介

配布資料にて監査委員と病院側の出席者の紹介があった。

2. 前回議事録の確認

前回議事録の確認を行い、承認された。

3. 監査項目

1) インシデント件数について

標記について、2020年度と2021年度のインシデント内容分類、職種を比較し、報告がなされた。内容分類については、内服に関するインシデント報告件数は2020年度第1位であったが、2021年度は第3位へと減少している。また、医師、研修医の報告件数については、2020年度は手術件数が減少した中、報告率は-1.1%であり報告率は維持出来ている。COVID-19については、担当医療者の心身の負担を軽減する為、各診療科からの呼吸器内科への支援を行い、看護師は各病棟から3か月ごとにローテーションを行っている。その為、1/3の人員が入れ替わっているが、4月からの5か月間でインシデント報告率や事象レベルで優位な変化がないことから、報告する文化が維持できていると考える。

2) 2021年度 医療安全管理部門 部門目標 上半期報告

① インシデントレベル0の報告件数をインシデントレベル1以上にし、事故の未然防止を図る

標記について、インシデント報告への取り組みの報告がなされた。2021年度のインシデント報告への目標のひとつに、「インシデントレベル0の報告件数をインシデントレベル1以上にし、事故の未然防止を図る」とした。この目標設定は、ハインリッヒの法則からすれば、ヒヤリとする、ハットするようなことを防げば軽微な事故は発生しない、軽微な事故を防げば、重大な事故は発生しないというものによる。レベル0の報告件数増加への取り組みとして、改善策の記入時に発見者への感謝の内容でも構わないとし、記載の負担軽減や前向きな報告となるよう取り組みを行った。上半期の集計結果、レベル0はレベル1の約1/3の報告件数となった。中間評価では、セーフマスターの文言の修正、医療安全ニュースでの周知、回覧等の改善策を検討し、さらにレベル0の件数増加に向けて取り組みを行っている。

②セーフティマネージャーとともに医療安全文化を醸成する

Team STEPPS の導入による医療安全文化の醸成の報告

標記について、Team STEPPS 研修の成果の報告がなされた。予定していた研修内容が終了した為、全ての Team STEPPS 研修を受けた感想を受講者に聞き、回答を Ai テキストマイニングにて分析した。解析結果から、チーム医療の実践方法や考え方の知識が得られ、リーダーやスタッフと共に行動して実践していきたいというポジティブな感情となったことから、チーム医療実践を意識づけたと推察する。また、この研修をきっかけに、看護部では係長と主査に対して受講を必須としたり、BSC に取り入れた病棟もあり、セーフティマネージャーだけでなく、現場スタッフにも広がりつつあることから、医療安全の推進・質の向上が期待される。

2021 年下半期の取り組みとして、コロナ禍で集合研修ができない状況ではあるが、Team STEPPS 研修で集合、体験でなくとも理解が得られたことから、新たに「心理的安全性の高い組織・チームを作る」というテーマで研修を行っていく。

3) インシデント分析からの改善～失神による転倒転落対応～

2021 年 7 月 4 日に第 11 回失神研究会で医療安全管理部門が発表した内容の報告がなされた。転倒転落の内的要因の 1 つに失神があり、失神による転倒転落では受け身を取れないことが多く、骨折等の重症外傷のリスクがあることから、失神の予知予測が転倒転落を減少させる可能性があるか検討を行った。検討の結果、転倒転落例の内、失神例、前失神と疑い例が 17.4%も占めていたことから、従来の転倒転落予防失神へのアプローチが必要であり、50 歳以上、D ダイマー、BNP、失神歴、失神に関連する副作用がある薬剤などが失神予兆を捉える因子になると考察された。また、失神分類すると起立性低血圧による失神と反射性失神で約 80%を占めたことから、入院前の体位による血圧変動は重要な予測因子となりうると考察され、入院前の排尿排便時の前失神症状の存在や便秘の有無、前立腺肥大の有無と α 遮断薬の投与等の薬歴を知ることが予測に役立つと考察される。その為、血圧変動に対して、病室、トイレ、廊下等へビデオカメラの設置をし、失神の診断をする、下肢弾性ストッキング・腹帯の使用、カウンタープレッシャーマニユーヴァの教育、起立訓練の実施、上半身を高くした睡眠等の対策が重要である。以上のことから、失神の予知予測は転倒転落を減少させる可能性がある。

4. 講評

3 名の委員より以下のとおり講評があった。

【貝阿彌委員長】 インシデント報告への取り組みについて、インシデントレベル 0 の報告件数の増加への取り組みをしていることは、事故の未然防止を図るために意味のあることだと思われる。もっとも、インシデントレベル 1 の報告件数以上にするという目標を設定することは、「患者に実施されなかった。」と「患者への実害はなかった」というやや性質の違うものを比べることになり、やや疑問が残る（実際にも、レベル 0 の報告件数はレベル 1 の約 3 分の 1 にとどまっている）。目標設定を工夫されたい。

Team STEPPS 研修について、アンケート回答を読むと、チーム医療の実践に活かしていきたいという意識を持たせており、有意義なものであると思われる。今後は、この研修で学んだことを実際の医療現場でどのように活かしたか、あるいは活かせなかったかについて紹介し合う機会を持つことも検討されたい。院内の転倒・転落と失神との関係に着目して検討した結果、失神の予知予測が転倒・転落を減少させる可能性があるとの結論を導いたことについては、興味深く読んだ。この検討結果を実際の医療現場でどのように活かしていくかが今後の課題であり、その実践についても報告を聞きたい。これらのことは他の病院でも大いに参考になるとと思われる。

【高橋委員】2021年度インシデント報告への取り組みについて、レベル0の報告を増加させ軽微な事故を防ぐことにより、重大な事故を未然に防止する試みは傾聴に値する試みと思われる。レベル0の報告件数増加への取り組みについて、上半期ではレベル1以上の報告件数に至っていないが、今後の報告数増加の積極的な取り組みを期待する。軽微な事故を防ぐ方法については言及されていないが、最近ではレジリエンス・エンジニアリングに基づく安全マネジメントという概念での取り組みがなされている。この様な考え方も取り入れたらよいと思われる。文言の変更等前向きな報告については効果的であり、前向きな取り組みと考える。下半期に向けてさらに推進したら良いと思う。Team STEPPS について、昨年度からセーフティマネージャーを対象に行われた、Team STEPPS 研修で得た成果は、コロナ禍においては集合・体験型トレーニングが出来ないため、知識習得により実践に繋がっている。AIによる解析については興味深い。

下半期では「心理的安全性の高い組織・チームを作る」研修から臨床現場での実践に繋がられるよう意義のあるものにしてほしい。

【越石委員】Team STEPPS の研修が昨年7月より今年8月まで、計14回実施されており、今年度に入りコミュニケーション関係が3回実施されている。これは、医療過誤の3分の2以上がコミュニケーションエラーと言われている為、係る領域の研修が重要視されているものと思われる。また、Team STEPPS の研修後の感想の中に、職種間のコミュニケーションの指摘もあり、医療安全の為に声を上げていきたい旨の回答等は本研修の成果でもある。チームで行う医療現場では、職種を超えてなんでも言い合える、いわゆる「Assertive communication」は肝要である。今後とも、定期的に本研修を実施され、患者にとって更なる「High Reliability Organization」たる大学病院になることを期待している。

以 上